分科会研究発表・研究協議等記録

高等学校

第９分科会

北海道恵庭南高等学校

第10分科会

北海道北広島高等学校

漁川ダム　えにわ湖（恵庭市）

クラーク博士記念碑（北広島市）

研究主題

「運動好きな生徒を育て 豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」

～仲間と共に心と体をはぐくむ「体つくり運動」と「剣道」の実践～

北海道恵庭南高等学校

１　研究発表の概要

発表者：北海道恵庭南高等学校　教諭　加藤　　忠

(1)　研究主題設定の理由

本校では，普通科生徒の運動部活動加入率が低く，体育の授業以外で運動やスポーツをする機会が少ない。そのため，普通科生徒に対して，運動やスポーツの動機付けを図り，身体を動かすこと，汗をかくこと，スポーツをすることの心地よさを体感させたいという観点で主題設定した。

(2)　研究の仮説

自分自身の体力を知ることが，運動スポーツへの関心・意欲を高め，日常的に運動する生活習慣が身につくのではないかと仮説を立てた。具体的には，身体の変化が分かりやすい心拍数に着目しデータ収集を始めた。

研究のデータとして，運動前と運動後の心拍数や運動後の心拍数の回復から体力が向上していることについて検証し，そのデータを生徒へ還元することで，運動による身体の変化を知り，運動への関心・意欲を持ち，運動するきっかけ作りになっていると推測した。

(3)　研究の視点

〈視点１〉 グループ学習などの授業形態の工夫

「体つくり運動」では，仲間づくりやコミュニケーション能力育成のため，グループ学習を中心に授業を行い，生徒の主体的な活動を促すため，教材として音楽の活用や様々な教材の工夫に重点を置いた。

また，運動の途中に心拍数を測定して，自分の身体の状態を確かめさせ，心と体の一体化を図った。

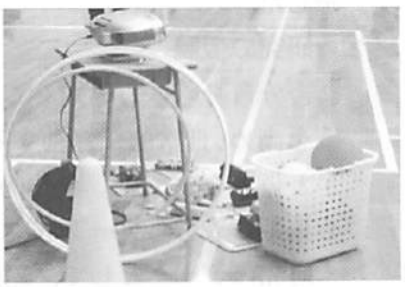
〈視点２〉 武道における導入の工夫

「剣道」では，導入段階で剣道に対するマイナスのイメージを取り除く工夫をし，遊び感覚の楽しさを多く取り入れ授業を進めた。また，グループ学習を取り入れ，生徒同士のコミュニケーションを図りながら課題解決に取り組み，剣道の特性を理解させることに重点を置いた。

2　公開授業について

(1)　第１学年　体つくり運動　　授業者　工藤　直人

授業では，グループ学習を中心に実施した。導入段階のウォームアップまでは，かなり緊張していたようだが，班長がみんなを上手にまとめ本時のねらいに沿って活動していた。しかし，活動内容によっては，つい自分たちの運動に夢中になり安全面での配慮が足りない生徒も見られた。３年間の単元計画を進めるにあたり，安静時の心拍数・運動直後の心拍数を測定することで，体の状態を理解させることと，仲間の体の状態を知ることが重要になる。はじめは心拍数を測定できない生徒も数名いたが，助言と回数を重ねる中で解決に向かった。もう少し努力を促す必要があると判断した生徒への声かけ・助言もスムーズにでき，学習活動全体がグループ毎に音楽を使用したことで，更に緊張感がほぐれ，普段の活動以上に仲間と共に心と体をはぐくませることができた。



(2)　第２学年　武　　道　「剣　道」　　授業者　栄花　英幸

授業では，生徒主導型のグループ学習を行った。生徒たちは緊張していたが，元気な声が出ていて楽しく活動していた。体育科生徒のクラスなので，行動は敏速で積極的な学習活動となった。グループのリーダーには，剣道部所属の生徒に当てたので，班員への指示は的確に伝わっていたと思う。剣道授業として特に気をつけてきた点は，イメージチェンジである。このことの導入なしでは，楽しい剣道授業は考えられなかった。そこで取り入れたのが，類似した運動である。例えば，すり足（足捌き）を習得させるために，スポンジを使った遊びを行う。生徒たちには，それがすり足練習とは一切伝えずに活動させた。あとで改めてすり足の練習に入ると，遊びでやったことを思い出すことになる。このようにその種目に関係の

ない用具などを使ったりすることで，苦手意識を克服することができるようになる。それがすべての場面で通用するかどうかは分からないが，剣道という種目が苦手だと思っている生徒に，自分の得意種目の練習方法をさせて，それが剣道の技術習得に結びついているとしたら，きっと剣道授業に入りやすくなってくるものと考える。

3　研究協議

(1)　研究について

運動好きの生徒を育てるため，体育の授業では毎時間ウォーミングアップとしてランニングを取り入れ，定期的に生徒に心拍数を測定させることで，自己の体力が向上していることを気付かせ，運動やスポーツへの動機付けを図ってきた。

普通科１年生の10月に測定した心拍数は，４月に測定した心拍数に比べ，ウォーミングアップ後では男子では平均して13拍，女子では平均して８拍減少し，一般的に発汗現象の現れる120拍／分に近づいた。また，12月の測定では，ウォーミングアップ終了２分後の心拍数は男女ともウォーミングアップ前の心拍数の約８割までに回復していた。このことは，心肺機能の上昇があり，体力が向上したことを示している。

来年４月に新体力テストを実施し，生徒一人一人が自己の体力を数値で確認することにより，体力向上を実感として感じることができ，運動への動機付けが図られるものと期待する。

ア　公開授業１『体つくり運動』

質問①生徒の運動資料・運動カードを事前に配布と研究資料に書かれていましたが，これはどこかに出ていた資料・教材なのか，先生が独自で作成されたものなのか。また，曲を流してやっているが，曲を流すことでどんな効果を期待しているのか。

回答：まず，大修館・一橋・キンダーコンデショニングトレーニング・体つくり運動（小・中学校で扱っているもの）を参考にまとめて作成している。次に音楽については，生徒が来る前に曲をかけてどんな気持ちになるのか，曲と自分の気持ちや曲を聞くことで自分の心にどんな変化があるのか，生徒にはもっと楽しくやるためには何がいいか，などと自分に問いかけることができる。また，生徒には曲をかけることで楽しくなり，堅いイメージを取り除く効果がある。

質問②３班は「だるまさんが転んだ」や「花いちもんめ」などをやっていたが，取り組み方が大切だと思うが，自分たちで工夫してやっているのか。

回答：意識はしていない。７つの種目から４種目以上選び選択していく。今回に関しては，自分のことも知りながら，みんなの事も考えて全員でもっと運動を楽しもう，体力を高めようという考えで進めている。ノートには『こんな入り方も良いね』と書いてやることもある。また，激しく入って行くこともあると思う。体ほぐしについては，入り方にこだわっていない。

質問③世代別体つくり運動コースについて，高校１年生から２年・３年と続いていく見通し・問題点をお聞かせ下さい。

回答：今回が始まり。これから私たち体育教員が本気で取り組み，２年・３年と指導していく。地域貢献型をこれからＰＤＣＡ（計画・実行・評価・改善）を実施する中で，

進展させていきたい。

イ　公開授業２『剣道』

質問①剣道（授業・練習）に関する類似運動の事例をいくつか教えて下さい。

回答：例として，バレーボール・サッカーボールを使用しスローイングをさせると，振り上げ（＝振り下ろし）の足の引きつけにつながる（剣道の素振りに大切）また，新聞紙でボールを作る。竹刀でボールを切る。最後は縦に切る。いろんな動きを使って剣道に導いていく。

感想：武道を好きになる。武道のイメージ（くさい・痛い・寒い・熱い・嫌い）を払拭するためには，運動を好きにさせ，武道を好きにさせることの授業の工夫が必要です。今日の剣道授業は非常に勇気のある授業で大変良かった。また，体つくり運動に関しては１年生ではなく２年・３年生の授業が見たかった。体つくり・剣道の授業両方とも非常に良くまとめられていて良かった。次年度は東京開催だが今日の発表を超えられるものにしたいと考えています。

4　指導講評　東海大学教授　小澤　治夫　氏

工藤先生お疲れ様でした。また，昨日の新体操のアトラクションもご苦労様でした。自分も部活動指導に命を掛けていましたが，部活動を一生懸命に指導している先生が良い体育授業をすることができればまさに鬼に金棒です。今日の体つくり運動の授業は普通科１年生ということでやりにくかったと思います。特に，女子の動けない生徒の扱いに苦慮することが多いですが，動けない生徒をどう動かしていくかが一番難しいと感じました。体つくり運動は，「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成されており，単元としてまとめて実施しなければならないことになっています。しかし，現実的には高校ではなかなか展開されていない実態があります。私は，体ほぐしの運動をもっと準備運動のなかに取り入れていく必要があると思います。そのためにも単元として体つくり運動を定着させることが大切です。体つくり運動の単元では最初は体ほぐしの運動を多めに取り入れ，徐々に体力を高める運動を増やしていくと良いと思います。

栄花先生お疲れ様でした。授業においては教師との一体化が大切であり，今日の剣道の授業はまさに栄花先生が生徒の中に溶け込んだ授業が行われており，授業の勢いが感じられる私の一番好きな授業展開でした。授業というのは教材とそれを展開する教師がキーポイントになるということを今日の授業を見て改めて感じました。

今日は授業の教材化の工夫と教授法について話をさせていただきます。私は以前高校で体育の授業を教えていましたが，私の授業のキーワードは「エールで士気を高める」，「挨拶をしっかりする」，「喜びを表現する」でした。子どもたちを授業に夢中にさせることが大切であり，その中で思いっきり喜んだり，悔しがったりなど様々な体験をさせるよう取り組んできました。高橋健夫先生が提唱していますが，良い体育授業の条件は，勢いがあり，雰囲気の良い授業で，「歓声があがる」，「賞賛の声が湧く」，「励まし合う」，「お互いに教え合う」という４つの姿が観察された時に良い授業となります。そのために「意味のあることを」，「熱意を持って」，「上手に教える」，これを「小澤流：教えの極意３か条」と言ってます。「意味あることを」とは教材ということであり，体育の授業では，大変だけど楽しかっ

た，楽しかったけどきつかったということを感じさせることが大事です。体育授業の目標に楽しさを教えることとありますが，それは単に喜んで楽しかったということではなく，「できた」，「何かが分かった」という実感を持たせることが大切です。長距離走や鉄棒，剣道，柔道，体力テストなどは生徒にとっては苦手な種目，サッカーなどの球技は好んでする種目と言えます。特に体力テストは聞いただけで先生も生徒も引いてしまいます。体力テストの実施率を見ると，しっかりと実施している学校ほど体力も高いことは明白です。体力テストを楽しくできる方法を工夫することで生徒のモチベーションを高めることができます。例えば，体力テストをイベント化して選手宣誓を行ったりユニフォームを揃えたりすることでクラスの団結が強まり意欲が高まります。小学校の先生は授業づくりが上手ですが残念なことに専科の教員は少ないです。高校の先生は専門家ばかりですが威圧的な授業が多いのが残念です。指導者としての威厳を保ちながらひとたび授業が始まると，先生自身が明るく，生徒から歓声が上がる，生徒が夢中になるような授業が望まれます。今日の剣道の授業は，そんな素晴らしい授業であり我々もあのような授業を目指さなければならないと感じました。ある学校ではバレーボールの授業でラリーが続かず授業が盛り上がらないことから，柔らかいボールに替えたとたんに生徒の意欲も高まり，歓声が上がるようになり，結果として体力も向上したと聞いたことがあります。また，走り幅跳びの授業では人形モデルを用いて動作説明を行ったり，スタートフラッグを用いたり，走路の白線をまっすぐに引いたりすることで子どもたちの意欲が高まり，記録が伸びました。体力テストの記録が伸びていないのは子どもたちが意欲や気力を持って臨んでいないことも原因であろうと思います。我々体育教員は教材や教具を工夫し有効に活用することで生徒のやる気を高めることができるのです。指導に当たっては，言葉が人を育てるといわれますが，難しいことを難しく教えるのではなく，難しいことを簡単に分かりやすい言葉で教える，即ち指導言語を活用することも有効です。

人間の神経細胞は生まれてからどんどん発達して複雑に絡んでいきます。神経発達の著しい特に高校期に様々な体験をすることは極めて重要です。脳の血流量を見ると，テレビゲームや漫画を長く見ている子どもは，前頭野の血流量は減少し，頭は発達しません。一方，両手運動・編み物・会話をする・集団遊びなどは，血流量は増加しています。だから学校で球技をしたり，戦術学習をしたり，コミュニケーションをしなければならないのです。それが学校の役割です。運動は筋肉や骨だけではなく脳も発達させてくれるのです。また，ピンチやストレスも人を成長させてくれます。私たちの頃はテレビもなくみんな腕白な時代を過ごしていました。そして授業はというと今で言う体つくりばかりで徹底的に鍛えられました。苦しくてきつかったという思い出しかありません。これからは次世代型の授業として「楽しかったけどきつかった。きつかったけど楽しかった」こんな授業が求められてきます。自然体験が減少すると脳の働きが阻害されます。自然体験のある子どもほど道徳観や正義感が高い。今の子どもは携帯電話ばかりで体育の授業でも思いっきり体を動かしていません。だからチャレンジ精神が乏しいのです。子どもの身体活動がどんどん激減している現在，部活動や学校体育が極めて大きな役割を果たすことになります。体力の高い秋田県では教育標語に「朝食をしっかり摂る」，「早寝・早起き」とあります。福井県は毎日運動していると回答している割合は高い。また体力は学力や就職率，経済力などとも相関しています。北海道の先生から「これだけ頑張っているのに体力は低下する一方だ」という声を聞くことがあります。その大きな原因は社会構造の崩壊にあり社会教育や家庭教育の低下でもあります。体力は生活習慣と密接に関連しています。北海道の子どもたちの肥満傾向は高い。これは食べている量が多いというわけではなく体を動かす機会が少ない

からです。学校まで自動車で送迎するなど日常生活での身体活動が極めて少ないのです。学力偏差値と部活動との関係を見ると学力偏差値の高い学校ほど運動部入部率が高い。体力の上位群はテレビの視聴時間も短く，運動が好き・体育が楽しいと回答しています。我々，体育の教師だからこそ，自分自身がスポーツを楽しみ，体を鍛えなければなりません。体育の授業においてはソフトだけではなく授業に大きくかかわる教師の存在も影響します。スポーツは楽しいという思いをもっていないと良い授業はつくれません。

5　成果と課題

(1)　成果

「体つくり運動」は，授業前の準備運動と補強運動という生徒のイメージを払拭し，自己の健康を考える上で大切な領域であると理解させる。３年間の授業計画は，自己のねらいに応じた「体つくり運動」であり，「わかる」「できる」「かかわる」を基本として，１年次から２・３年次と進展する中で，健康とは何か，個人・仲間・家族の健康を考える事に主眼をおいた。まずは，今年度から先行実施できたことが成果である。

「剣道」は，日本伝統文化であると同時に，どうしても型にはまった堅いイメージがある。体育授業では，生徒たちが楽しく，積極的に体を動かす喜びを感じさせなければいけない。今回はグループ学習をとおして，互いに協力し合いながら活動内容を考え，自己評価をするという方法を取り入れた。初めての取り組みであったが，生徒たちの笑顔や，あちらこちらで笑い声が出るなど楽しそうな姿に感動した。剣道が一見堅いイメージから柔らかいイメージに変わった瞬間であった。その中で，武道特有の「静」と「動」の関係や，日本の伝統文化の一つとして剣道を学ばせられたことが成果である。

(2)　課題

今回，本校体育科が発表した「運動好きな生徒を育て豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」～仲間と共に心と体をはぐくむ授業～の実践は，体育実技の全ての単元で共通のテーマでもある。各単元の特性の理解や技術の習得をめざす中，生徒の主体性と意欲を引き出す学習活動を展開するために，授業者はより良質な授業プランを準備しなければならない。新学習指導要領にある教科目標と各種目の評価の観点を十分に踏まえながら，各単元毎の指導計画を体系化させ，授業改善の意識を継続する必要がある。そして，本校の授業実践の情報を積極的に発信し，より良い体育授業の実践をめざす体育教員と共に切磋琢磨し，本道の学校体育の発展に寄与したい。

研究主題

仲間と共にスポーツの楽しさに触れ，知的に理解することを通して，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質をはぐくむ体育学習の追求

～新学習指導要領の先行実施を通して～

北海道北広島高等学校

1　研究発表の概要

発表者：北海道北広島高等学校　教諭　内海　　久

(1) 研究主題

本校保健体育科では大会主題の本質を「将来の実生活でスポーツを継続するための確かな体育の力の育成」であるととらえて，生徒一人一人に「自ら学ぶ力」と「仲間と共に学ぶ力」を身に付けさせ，自らスポーツに親しもうとする態度を養うことができるような授業を計画してきた。

本校は昨年度の入学生から単位制に移行し，このタイミングに合わせ，保健体育科では新学習指導要領を先行実施している。今回の指導要領改訂の趣旨を保健体育科では，①思考力・判断力・表現力の育成，②主体的に学習に取り組む態度，③言語活動の充実，と捉えて年間指導計画および各単元での指導計画を大幅に見直すこととなった。

このことに関わり，仲間とのコミュニケーションおよび言語活動の充実を通して論理的思考力を養うことから体育的学力へ，教材や学習形態の工夫から関心を起こさせ，仲間と共に学ぶ楽しさやその効果を理解することを通してスポーツを継続する資質へと結び付けたいと考えたことから研究主題を設定した。

(2) 研究の仮説

「スポーツの楽しさ」「体育的学力」「主体性」の3点を経験，獲得することによって「豊かなスポーツライフを継続する資質」を育むことができるであろう。

①体育的学力とは

体育の指導内容（技能，態度，知識，思考・判断）がバランスよく身に付いた能力のことである。特に知識については学習指導要領では「言葉や文章など明確な形で表出することが可能な形式知だけでなく，勘や直感，経験に基づく知恵などの暗黙知を含む概念であり，意欲，思考力，運動の技能の源となるものである。」とあることから重きを置いて捉えている。

②主体性とは

自分の意志・判断で行動しようとする態度のことである。主体性のある生徒の姿とは，自ら課題を見つけ，自ら学ぶ糸口を発見し，計画・創造することができるものと考えている。

③目指す生徒像

本校の重点目標及び本大会での目指す児童生徒像「生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども」を受けて，本校での目指す生徒像を以下の３点として掲げた。

ア　自主的・主体的に学び，課題を知的に捉えて取り組み，解決していく。
イ　仲間との言語活動を積極的に図ることから論理的思考力・判断力・表現力を養う。
ウ　運動の必要性や楽しみ方を理解し，主体的・継続的に運動に親しむ。

(3) 研究の視点

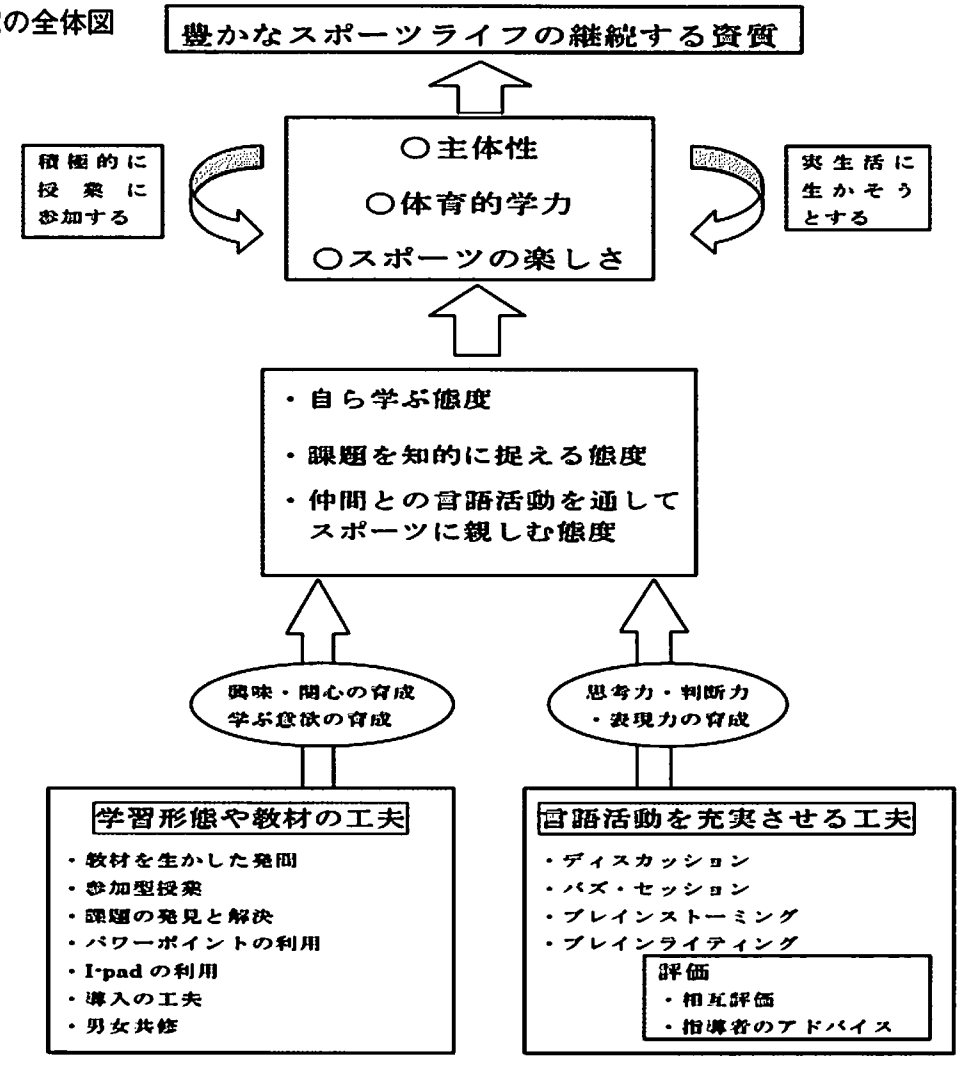
〈視点１〉学習形態や教材の工夫

ねらいに応じて日常生活の中で親しみのある題材を教材化することにより，意欲・関心を高めることができ，運動の本質的な楽しさや喜びの体験を味わうことができる。興味関心をもち，楽しく学習することから主体性が身に付き，学習内容の理解を深めることができる。

〈視点２〉言語活動を充実させる工夫

思考力・判断力・表現力を育成させるためには課題解決的な取組が必要であり，仲間とのコミュニケーションから論理的思考能力を向上させることができる。また協同的な作業を通して仲間と共に学ぶ楽しさを味わうと同時に，主体的に学習に取り組む態度も養われる。

研究の全体図



2　公開授業について

(1)　第１年次　領域名「体育理論」　　授業者　森田　　有

第１単元「スポーツの歴史，文化的特性や現代のスポーツの特徴」

単元名　「スポーツの経済的効果とスポーツ産業　２／２」

①教材の工夫

本時の学習内容は前時の学習を深める内容であるため，はじめにパワーポイントを用いたポイントを絞った文字表記によって前時の学習内容を確認した。パワーポイントの使用はポイントを明確に確認することでき，生徒をレディネス状態へと準備させることができた。

次に，本時の学習内容に関心を持たせるため，「プロ野球キャンプ地の経済効果」についてのニュース（動画）を視聴した。視聴後，発問を行い生徒との距離を縮めていた。

スポーツのもつリアリティと文化的特性や美的特性を視聴覚教材で効果的に活用することによって生徒の興味・関心を引き出し，つまらない印象がある理論という授業に対して興味をもたせ，モチベーションを向上させるために使用した。

グループでの発表の際には実物投影機を使用することで，まとめた表をプロジェクターに映し出しながら説明することができ，活字を通して理解することの一助となった。

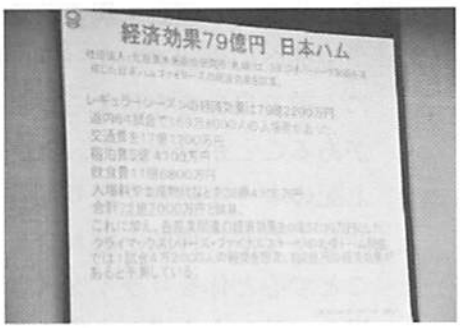


写真１　パワーポイントの利用

写真２　実物投影機を用いた発表

写真３　ワークシート

写真４　ディスカッション

②言語活動を充実させる工夫

８グループに分かれ，リーダーの生徒が中心となり「スポーツへの多様な関わり方」をＣＭやＶＴＲを参考にしながら活発な意見交換をした。前回の授業でワークシートに個人の意見を書き出させていたため，グループ内で意見交換をしながら論理的に説明できるようにまとめていた。グループ活動を行うことにより，必然的に授業へ積極的に参加することを余儀なくされ，主体的に考える機会が与えられることから自主的に取り組むことにつながったと思われる。そしてグループ毎に発表することにより，考えをまとめたり論理的に説明したり，他の考え方を聞くことを通して，話を理解する力や物事を多方向から捉える力を養えたとも感じている。

(2) 第２年次　領域名「ダンス」　単元名「創作ダンス」　　授業者　堀川　政彦

①基本運動

創作ダンスの単元では，基本運動（教材）を使用して動きの基本を身につけさせている。準備体操・ウォーミングアップとなる他，創作の際に表現の手がかりとなる動きを身に付けることができる。

写真５　基本運動

②心と体ほぐし運動・男女共修

生徒への事前アンケートの結果から，多くの生徒に人前で自分を表現することへの不安や恥ずかしさがあることが分かった。ダンスの主運動に入る前に，上記のような障壁を取り除くため，導入では誰もが楽しみながら仲間と触れ合える体ほぐし運動を行うことで心と体をリラックスさせた。この時に敢えて男女で触れ合う場面を作ることで異性と触れ合う恥ずかしさを取り除くことができ，その後の活動がスムーズになった。

写真６　体と心ほぐし運動

次に８８４４２２１１１１のリズムでリーダーの即興的な動きに合わせて，全体で同じ動作を行った。生徒が動きを作り，みんなで同じ動きをするため，楽しみながら体を動かすことができた。

写真７　８８４４２２１１１１

③作品つくり

短い時間で即興的な作品を創作するために，本時のテーマ「スポーツ名場面」から湧くイメージをイメージカードに記入させていく。記入した内容からグループで簡単に話し合い，自分たちの作品を創作していく。イメージカードを使用することで動き出すまでの時間の短縮に繋がったと思われる。

さらにＤＫＷを設定することで何に注意して創作するかが明確に意識できたと思われる。

写真８　イメージカード

④見せ合いの設定と視聴覚機器（i-pad）の活用

グループごとに即興的な作品ができたら，２グループごとに作品を見せ合い，賞賛や意見を述べてより良い作品つくりに向けたコミュニケーション活動を行った。

その際に「i-pad」を活用することで，その場その場での素早いフィードバックを可能にしている他，コミュニケーション活動もより活性化され，動きについて具体的な意見を引き出す効果があった。

写真９　i-pad の活用

3　研究協議

(1)　研究について

質問　年間計画の意図を教えてほしい。

回答　先行実施にあたって現行の良いところは残したい。本校での体育の役割は授業規律。しつけ指導も必要と考えたので，前半は男女別に一斉指導型に。後半から生涯を通してのマイスポーツを作れるように意図がある。領域選択は２・３年はコンプリートしている。

意見　柔道とダンスの領域選択には違和感がある。

(2)　第１年次　「体育理論」

質問　本時の授業から評価の見取りはどのように行うのか。

回答　テストのような形式で簡単な知識，学んだ感想を書かせる。体育の評価の一部とする。

意見　評価方法が４つ見なければいけないところが苦しい。

意見　ＣＭやプロ野球キャンプの映像は軸がずれているように思う。

意見　ＴＴで行っているのであれば，Ｔ１Ｔ２の役割分担があればよいと思う。

(3)　第２年次　「ダンス」

質問　音楽の選曲，動きの作り方に生徒は関わっているのか。

回答　選曲は教員。１２１２，２ビートや８ビート等の合わせやすいもの。流しながらリラックスできるもの。強弱も考慮。動きの作り方については，少し動きを指導したが後は生徒に任せた。

質問　事後アンケートをとる予定はあるのか。子供たちの変化をとる予定はあるのか。

回答　授業終了後アンケート予定あり。

質問　i-pad は他種目でもしようしているのか。

回答　跳び箱やマット運動で使用している。

質問　普段の評価をどうしているのか。

回答　作品つくりの関わり方で評価しているが，まだまだ研修が必要である。様子を見ながら記録・記憶で評価に繋げたい。i-pad でも動作を確認して評価できる。

質問　男子を指導する際の課題はあるか。

回答　特にない。男子のほうが恥ずかしがらないことが多い。女子のほうがおとなしくてどうしてよいかわからないところが多い。

質問　基本運動は参考にするものがあったのか。生徒の練習過程を教えてほしい。

回答　ダンスのラジオ体操のようなビデオが１～６までであり，それを利用している。視聴覚機器（プロジェクター）で対応し，４時間くらいでマスターしていた。

写真10　研究協議

4　指導講評　　指導助言者：早稲田大学　教授　友添　秀則

(1) 研究について

特になし

(2) 第１年次　「体育理論」

・意見を出させた結果がオープンエンドでは駄目である。経済効果の79億円が生まれたのか，移動して集まったのかを生徒に伝えなければならない。

・スポーツへのかかわり方で「支える」の項目は生徒は書けないため，「調べる」「知る」で考えさせると理解しやすくなると思われる。

・79億円という額を「北広島市の予算」「大卒の生涯賃金２億円」「総理大臣の給料」等の具体例と比較すると数字のインパクトが出てイメージをしやすい。

(3) 第２年次　「ダンス」

・導入のランニングは体つくりと思われる。スキップやサイドステップなどを入れたり，グループジョギングにしたりすると良かった。

・創作がワンパターンだと表現力が乏しくなるため，教材解釈をもう少し下ろして，解釈を変えるとよいと思う。

・踊りこみの時間をもう少し長くとるとよいと思う。名場面という解釈が少し強すぎるため，静と動，空間の使い方，シンメトリーへの反転が弱くなるかもしれない。

5　成果と課題

(1) 成果

○授業の導入から親しみのある題材を用いた教材や緊張をほぐすための教材を活用することにより，生徒の興味・関心を高めることができたと感じられた。その際に写真や動画を用いたり，仲間とコミュニケーションをとらせるとその後の授業内での発言や活動が活発になったため，より効果的であると思われる。男女共修の授業においては，お互いの恥ずかしさを取り除く上で絶大な効果があると感じた。

○ i-pad を活用することにより，自分達の動きをすぐに確認できることから課題を視覚やイメージで捉えることができる生徒が多く見られた。活用する機会が増す度にコミュニケーション活動も増えるため，積極的に発言する生徒も増加した。

○仲間とのコミュニケーション活動を通して，共に学ぶ楽しさを十分味合わせることができたと感じられた。話し合う活動を通して論理的に考える力が養われた結果，課題を知的に捉えて解決していく手立てを考察できる様子が見られた。

○話した内容をグループ毎に発表したり，ダンスの作品を発表し合うことを通して，相手の良さを認めたり課題を見つけられる様子が見られた。

(2) 課題

○様々な学習形態を活用していく場面の設定と効果的な活用方法の工夫。

○コミュニケーション活動を行う目的の明確化と追い込み方の工夫。

○発展性のあるものや追求できる教材や発問の研究と選択。

○中学校での学習内容を把握し，学びなおしを含め３年間の学習内容を見通した計画の立案。

○評価規準が適切であるか，実践を通して絶えず確認する体制づくり。